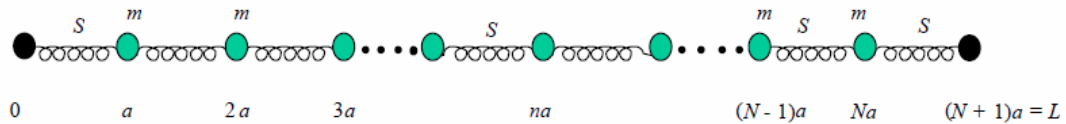


理論第 1 問

線形結晶格子の振動

下図のように、 $N$  個の等しい質量  $m$  の点状粒子が、自然長  $a$ 、ばね定数  $S$  で質量の無視できる  $N+1$  個のばねで結ばれ、端は固定された粒子につながれている。この鎖は、1次元結晶における振動モードのモデルとして用いられる。鎖が縦方向の振動をするとき、それは特徴的な振動数をもったモードと呼ばれる単純な振動の重ね合わせと見なすことができる。



- (a)  $n$  番目の粒子の平衡位置からの変位を  $X_n(\omega)$  として、運動方程式を書き下せ。  
 (b) 変位  $X_n(\omega)$  を、

$$X_n(\omega) = A \sin nka \cos(\omega t + \alpha), \quad 0 < ka < \pi$$

とにおいて、設問(a)の運動方程式を解け。ここで、振動モードの角振動数  $\omega$ 、波数  $k$ 、 $A$ 、 $\alpha$  はすべて定数である。 $\omega$  の  $k$  依存性、 $k$  のとり得る値、および、 $\omega$  の最大値を求めよ。こうして、鎖の振動は、これら振動モードすべての重ね合わせであることがわかる。ここで、必要なら下記の公式を用いよ。

$$\frac{d}{dx} \sin ax = a \cos ax, \quad \frac{d}{dx} \cos ax = -a \sin ax \quad (\alpha : \text{定数})$$

$$\sin(A + B) = \sin A \cos B + \cos A \sin B, \quad \cos(A + B) = \cos A \cos B - \sin A \sin B$$

プランクによると、角振動数  $\omega$  の光子のエネルギーは、プランク定数  $h$  を  $2\pi$  でわった量  $\hbar \left( = \frac{h}{2\pi} \right)$  を用いて、 $\hbar\omega$  と表される。アインシュタインは、角振動数  $\omega$  の結晶の振動モードもこのエネルギーをもつと仮定して飛躍を成し遂げた。ここで、振動モードは粒子そのものではなく、全鎖にわたり単振動をしている状態を表す。この振動は光子(フォトン)にならってフォノンと呼ばれる。これ以降、この考えにしたがって議論を進めよう。直線的な鎖の結晶において、粒子数は  $N \sim 10^{23}$  とする。

- (c) 与えられた角振動数  $\omega$  (あるいは  $k$ ) の系には、いろいろな数  $0, 1, 2, \dots$  のフォノンがある。このことから角振動数  $\omega$  をもつ特定モードの平均エネルギー  $\langle E(\omega) \rangle$  の計算方法がわかる。角振動数  $\omega$  をもつフォノンが  $p$  個ある確率を  $P_p(\omega)$  と表すと、必要とされる平均は、

$$\langle E(\omega) \rangle = \frac{\sum_{p=0}^{\infty} p \hbar \omega P_p(\omega)}{\sum_{p=0}^{\infty} P_p(\omega)}$$

となる。フォノンは離散的であるが、その数が非常に多いため、和は  $p = \infty$  まで拡張することができる ( $P_p$  は大きな  $p$  に対して非常に小さくなる)。さて、確率  $P_p$  はボルツマンの公式

$$P_p(\omega) \propto \exp\left(-\frac{p \hbar \omega}{k_B T}\right)$$

で与えられる。ここで、 $k_B$  はボルツマン定数で、 $T$  は結晶の絶対温度であり一定とする。比例係数は  $p$  によらない。このとき、角振動数  $\omega$  のフォノンに対する平均エネルギーを計算せよ。ただし、必要ならば、次の公式を用いてよい。

$$\frac{d}{dx} e^{f(x)} = e^{f(x)} \frac{df}{dx}$$

次に、温度  $T$  のときの結晶の全エネルギー  $E_T$  を計算しよう。設問(c)では振動モード  $\omega$  の平均エネルギー  $\langle E(\omega) \rangle$  を求めた。 $E_T$  を得るには、単位体積あたりの角振動数  $\omega$  のモード数だけ  $\langle E(\omega) \rangle$  をかけ合わせ、 $\omega = 0$  から  $\omega = \omega_{\max}$  までの全範囲の和をとることが必要である。

(d) 非常に大きな  $N$  と、断続的に続く波数  $k$  の間隔よりずっと大きな区間  $\Delta k$  に対して、 $\Delta k$  の間に見出されるモードの数はいくらか。

(e) (a) と (b) の結果を用いて  $\Delta k$  を  $\frac{dk}{d\omega} d\omega$  で近似し、和を  $\omega$  に関する積分に置き換えよう (こうして、 $k$  の代わりに変数  $\omega$  を用いるのが便利である)。この近似の下に結晶の全角振動数領域にわたるモード数の総和を求めよ。また、 $E_T$  はどのように表されるか。ただし、 $E_T$  の値を計算しなくてよい。必要ならば、次の積分を用いよ。

$$\int_0^1 \frac{dx}{\sqrt{1-x^2}} = \frac{\pi}{2}$$

(f) 結晶のモル比熱は、実験的には  $C_V = \frac{dE_T}{dT}$  と書くことが許される。上で議論してきた結晶に対して、 $T$  の非常に大きな値と非常に小さな値での  $C_V$  の  $T$  依存性を求めよ (それは温度によらない定数か、線形か、冪依存性をもつか)。非常な高温と非常な低温での傾向を示し、 $C_V - T$  の定量的なグラフの概略を描け。

理論第1問 【解答】

線形結晶格子の振動

(a)  $N$  番目の粒子には、右側のばねから弾性力  $S(X_{n+1} - X_n)$  が右向き(正の向き)にはたつき、左側のばねから弾性力  $S(X_n - X_{n-1})$  が左向き(負の向き)にはたらくから、運動方程式は、

$$\underline{m\ddot{X}_n = S(X_{n+1} - X_n) - S(X_n - X_{n-1})} \quad \dots\textcircled{1}$$

(b)  $X_n = A \sin nka \cos(\omega t + \alpha)$  を運動方程式①へ代入して、両辺から振動項  $\cos(\omega t + \alpha)$  を落とすと、

$$-mA\omega^2 \sin nka = AS\{\sin(n+1)ka - 2\sin nka + \sin(n-1)ka\}$$

ここで、

$$\begin{aligned} \sin(n+1)ka - \sin nka &= 2\cos\left(n + \frac{1}{2}\right)ka \sin \frac{1}{2}ka \\ \sin nka - \sin(n-1)ka &= 2\cos\left(n - \frac{1}{2}\right)ka \sin \frac{1}{2}ka \\ \cos\left(n + \frac{1}{2}\right)ka - \cos\left(n - \frac{1}{2}\right)ka &= -2\sin nka \sin \frac{1}{2}ka \end{aligned}$$

を用いて、

$$-mA\omega^2 \sin nka = -4AS \sin nka \sin^2 \frac{1}{2}ka \quad \therefore \quad \underline{\omega = 2\sqrt{\frac{S}{m}} \sin \frac{1}{2}ka} \quad \dots\textcircled{2}$$

これより  $\omega$  の最大値は、

$$\omega_{\max} = \omega_0 = 2\sqrt{\frac{S}{m}}$$

また、境界条件  $X_{N+1} = 0$  より、 $\sin(N+1)ka = 0$ 。ここで、系の長さを  $L = (N+1)a$  とおくと、 $k$  のとり得る値は、 $0 < k < \frac{\pi}{a}$  より、

$$kL = \pi, 2\pi, \dots, N\pi \quad \therefore \quad \underline{k = \frac{\pi}{L}, \frac{2\pi}{L}, \dots, \frac{N\pi}{L}}$$

(c) まず、温度  $T$  に関する微分を用いて、 $\langle E(\omega) \rangle$  を

$$\langle E(\omega) \rangle = \frac{\sum_{p=0}^{\infty} p\hbar\omega P_p(\omega)}{\sum_{p=0}^{\infty} P_p(\omega)} = \frac{\sum_{p=0}^{\infty} p\hbar\omega e^{-\frac{p\hbar\omega}{k_B T}}}{\sum_{p=0}^{\infty} e^{-\frac{p\hbar\omega}{k_B T}}} = k_B T^2 \frac{\partial}{\partial T} \ln \sum_{p=0}^{\infty} e^{-\frac{p\hbar\omega}{k_B T}}$$

と表そう。ここで、 $\ln$  は底が  $e$  の自然対数であり、 $\frac{\partial}{\partial T}$  は  $T$  に関する偏微分(他の変数を

定数とした  $T$  に関する微分)を表す。

$$\text{和} \sum_{p=0}^{\infty} e^{-\frac{ph\omega}{k_B T}} \text{ は幾何級数であり, } \frac{1}{1 - e^{-\frac{h\omega}{k_B T}}} \text{ となるから,}$$

$$\langle E(\omega) \rangle = \frac{\hbar\omega e^{-\frac{h\omega}{k_B T}}}{1 - e^{-\frac{h\omega}{k_B T}}} = \frac{\hbar\omega}{\underline{e^{\frac{h\omega}{k_B T}} - 1}}$$

(別解)

$\langle E(\omega) \rangle$  の計算は, 上のような微分計算をしなくても求めることができる。

$x = \frac{\hbar\omega}{k_B T}$  とおいて,  $\langle E(\omega) \rangle$  の分母の級数は  $\frac{1}{1 - e^{-x}}$  であり, 分子の級数は,

$$S = \hbar\omega(e^{-x} + 2e^{-2x} + 3e^{-3x} + \dots)$$

であるから,

$$e^{-x}S = \hbar\omega(e^{-2x} + 2e^{-3x} + \dots)$$

より,

$$(1 - e^{-x})S = \hbar\omega e^{-x}(1 + e^{-x} + e^{-2x} + \dots) = \frac{\hbar\omega e^{-x}}{1 - e^{-x}}$$

$$\therefore S = \frac{\hbar\omega e^{-x}}{(1 - e^{-x})^2}$$

これより,

$$\langle E(\omega) \rangle = \frac{\frac{\hbar\omega e^{-x}}{(1 - e^{-x})^2}}{\frac{1}{1 - e^{-x}}} = \frac{\hbar\omega e^{-x}}{1 - e^{-x}} = \frac{\hbar\omega}{e^x - 1}$$

と得られる。

(d) 設問(b)より,  $k$  の間隔は  $\frac{\pi}{L}$  であるから, 波数区間  $\Delta k$  におけるモードの数は,

$$\frac{\Delta k}{\pi/L} = \frac{L}{\pi} \Delta k$$

ただし,  $\Delta k \gg \frac{\pi}{L}$  とする。

(e) ②式より,

$$\frac{d\omega}{dk} = \frac{1}{2} a \omega_0 \cos \frac{1}{2} ka = \frac{1}{2} a \sqrt{\omega_0^2 - \omega^2}$$

と書けるから, 区間  $d\omega$  中のモード数  $dn$  は,

$$\begin{aligned}
 dn &= \frac{L}{\pi} \Delta k = \frac{L}{\pi} \frac{dk}{d\omega} d\omega = \frac{L}{\pi} \left( \frac{d\omega}{dk} \right)^{-1} d\omega \\
 &= \frac{L}{\pi} \frac{2}{a} \frac{1}{\sqrt{\omega_0^2 - \omega^2}} d\omega = \frac{2(N+1)}{\pi} \frac{1}{\sqrt{\omega_0^2 - \omega^2}} d\omega
 \end{aligned}$$

したがって、全角振動数領域にわたるモード数の総和は、与えられた積分を用いて、

$$\int dn = \int_0^{\omega_0} \frac{2(N+1)}{\pi} \frac{d\omega}{\sqrt{\omega_0^2 - \omega^2}} = \frac{2(N+1)}{\pi} \int_0^1 \frac{d\left(\frac{\omega}{\omega_0}\right)}{\sqrt{1 - \left(\frac{\omega}{\omega_0}\right)^2}} = \frac{N+1}{1} \approx N$$

この結果は、波数  $k$  のとり得る数が  $N$  であったことから当然である。  
結晶の全エネルギー  $E_T$  は、

$$E_T = \frac{2N}{\pi} \int_0^{\omega_0} \langle E(\omega) \rangle \frac{d\omega}{\sqrt{\omega_0^2 - \omega^2}} = \frac{2N}{\pi} \int_0^{\omega_0} \frac{\hbar\omega}{e^{\hbar\omega/k_B T} - 1} \frac{d\omega}{\sqrt{\omega_0^2 - \omega^2}} \quad \dots \textcircled{3}$$

(f) ③式の積分において、 $x = \frac{\hbar\omega}{k_B T}$  とおき、 $\hbar\omega = k_B T \cdot x$ 、 $\omega = \frac{k_B T}{\hbar} x$ 、 $d\omega = \frac{k_B T}{\hbar} dx$  と

書き換えると、 $x_0 = \frac{\hbar\omega_0}{k_B T}$  とおいて、

$$E_T = \frac{2N}{\pi \hbar \omega_0} (k_B T)^2 \int_0^{x_0} \frac{x}{e^x - 1} \frac{dx}{\sqrt{1 - \left(\frac{k_B T}{\hbar \omega_0} x\right)^2}} \quad \dots \textcircled{4}$$

ここで、 $T \rightarrow 0$  のとき、 $x_0 \rightarrow \infty$  より、④式の積分は、

$$\int_0^{x_0} \frac{x}{e^x - 1} \frac{dx}{\sqrt{1 - \left(\frac{k_B T}{\hbar \omega_0} x\right)^2}} \approx \int_0^{\infty} \frac{x}{e^x - 1} dx = \frac{\pi^2}{6} = \text{一定値}$$

よって、 $E_T \propto T^2$  となり、

$$C_V = \frac{dE_T}{dT} \propto T$$

である。

一方、 $T \rightarrow \infty$  のとき、 $e^{\frac{\hbar\omega}{k_B T}} - 1 \rightarrow \frac{\hbar\omega}{k_B T}$  となるから、③式は、

$$E_T = \frac{2N}{\pi} k_B T \int_0^{\omega_0} \frac{d\omega}{\sqrt{\omega_0^2 - \omega^2}} = N k_B T$$

これより、 $C_V = Nk_B = \underline{\text{一定}}$ となる。これは、3次元結晶でのデュロン・プティの法則を表している。

こうして、下記の $C_V - T$ 概略図を得る。

